

パレ全集 第12版にみられる歯科領域の記述 (1)*

高 山 直 秀**

緒 言

アンブロワズ・パレ (1510~1590) は近代外科学の父といわれる、フランスの最も有名な外科医の一人である。床屋外科医から出発し、主に戦場での経験から種々の治療法を考え出し、遂には国王の首席外科待医となったパレの業績は軍陣外科に留まらず、解剖、歯科、流行病など広い範囲にわたっている。彼はこれらの業績をまとめ、1575年にパレ全集として出版した。この全集には歯科領域の記述も含まれており、それらはすでに各種歯科医史学書に引用されている。しかしパレ全集の中にあって、歯科領域の記述としてどのようなものがあり、それらが全集の中でどの位の割合を占めているかを明らかにした報告はないように思われる。筆者はパレ全集の第12版 (1664) を見る機会を得たので、上記の点について検討した。

パレ全集の発行年および翻訳版

1575年に発行されたパレ全集は、彼の死後も版を重ね、1664年に第12版がリオンで、次いで1685年に第13版が同じくリオンで発行され、しばらく間を置いて1840年に Malgaigne 編のパレ全集が出版されている。パレ全集は各国語に翻訳されており、1582年に Jacques Guillemeau によるラテン語版、1592年に Calorum Buttum によるオラ

ンダ語版、1594年に Peter Uffenbach によるドイツ語版、1634年に Thomas Johnson による英語版が発行され、いずれも版を重ねている。さらに1649年発行のオランダ語版は日本にもたらされ、その一部が橋本鎮山によって邦訳された (1706年、「紅夷外科宗伝」)。

第12版の構成

第12版は 34×21.5 の1巻本で、本文は一段組み、各頁77~78行で850頁に及ぶ大著である。本文は30の書 (livres) に分けられ、それぞれの書は数十章から成っている。

各書はおおよそ次のような主題に当てられている。

- 第1の書 外科医を志す者の心得
- 第2の書 他の動物と比較しての人間論
- 第3~6の書 解剖
- 第7, 8の書 腫瘍論, 総論, 各論
- 第9, 10の書 創傷論, 総論, 各論
- 第11の書 銃創論
- 第12の書 挫傷, 熱傷, 壊疽
- 第13の書 潰瘍, 瘻孔, 痔
- 第14の書 包莖論
- 第15の書 骨折
- 第16の書 脱臼
- 第17の書 特殊な外科的疾患
- 第18の書 痛風
- 第19の書 梅毒
- 第20の書 痘瘡, 麻疹, レブラ
- 第21の書 狂犬, その他による咬傷, 刺傷
- 第22の書 ペスト
- 第23の書 欠損を補修する方法

* Sur les articles ayant relation à la dentistrie qui se trouvent dans les Œuvres d'Ambroise Paré, douzieme édition, 1664. (1)

** Naohide TAKAYAMA (本学会員)

本稿の要旨は第147回日本歯科医史学会例会に於て発表した。

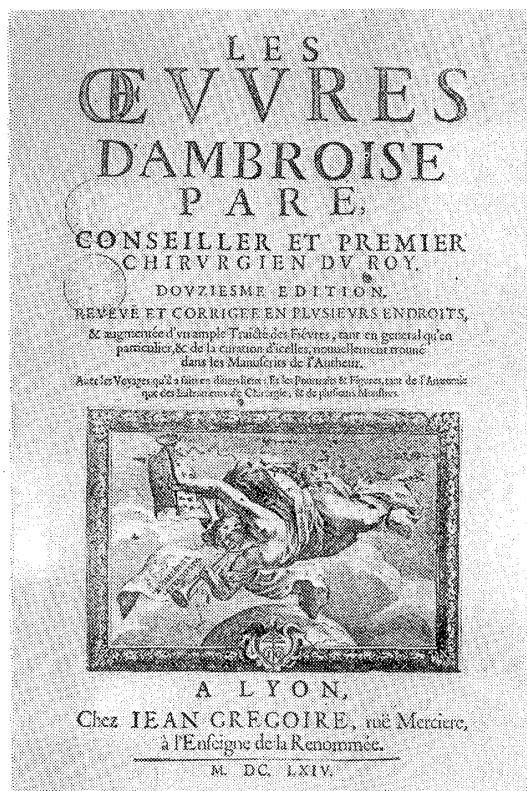


図1 パレ全集 第12版の扉

- 第24の書 人の発生
 第25の書 怪物と奇跡
 第26の書 薬物の効果, 組成, 使用法
 第27の書 蒸留法
 第28の書 診断報告書作成法および死体保存法
 第29の書 弁明と旅行記
 第30の書 熱病論 以上

歯科領域の記述

第12版には主なものとして以下の章がみられる。

- 第6の書, 第2章 歯 (55行)
 第8の書, 第4章 エプーリス (18行)
 第13の書, 第15章 口腔の潰瘍 (38行)
 第17の書, 第25章 歯痛 (88行)
 同 第26章 歯に生ずる種々の障害 (73行, 図1葉)
 同 第27章 抜歯に適した器具 (32行, 図3葉)
 同 第28章 歯垢 (15行)
 第23の書, 第3章 義歯調整法 (7行, 図1葉)

第4章 口蓋栓塞子の適用法 (11行と図2葉)

第24の書, 第95章 幼児の歯痛 (39行)

第26の書, 第38章 歯磨き粉 (37行)

いずれの章も長いものではなく, 第6の書の第2章, 第17の書の第25, 26章を除いては半頁, あるいはそれ以下であることが注目される。上記歯科領域の記述を合計してみると413行で約5.3頁分に相当する。他に図が7葉あるものの, 主な歯科領域の記述は850頁の全集の1%に満たない。

考 察

パレ全集の内容は実に広範囲であり, 歯科領域に関しても, 歯の解剖から義歯, 手術用器具まで記されている。しかし内容的には大半の章が半頁以下であることからわかるように必ずしも十分なものではない。特に義歯や口蓋栓塞子の記述は, 図が付されているとはいえ, 余りにも簡単で, 読者がどの程度理解でき, 実地に応用できたか疑われるほどであり, パレ全集の初版から約1世紀半遅れて発行されたピエール・フォジャールの「歯科外科医」中の義歯, 口蓋栓塞子の記述との間には雲泥の差がみられる。また歯痛, 歯の脱臼, 抜歯などが, 白内障, 結石, 尿閉などと共にその他の外科的疾患の中に合わせて述べられている。こうしたことから, パレの外科疾患大系の中で歯科的疾患は余り重要な位置を占めていなかったと結論してよいであろう。

〔謝辞〕

貴重な蔵書を貸出閲覧させて下さいました日本大学松戸歯学部谷津三雄教授に深謝致します。

参考文献

- 大村敏郎, アンブロワズ・パレの世界, 臨床外科, 35: 70-73, 209-212, 394-397, 522-525, 1980.
 川上為次郎, 歯科医学史, 金原商店, 1931.
 高山直秀訳, フォジャール歯科外科医, 医歯薬出版, 1984.
 山崎清, 歯科医史, 金原商店, 1930.
 Ambroise Paré, Les Œuvres d'Ambroise Paré, 12ème éd. Lyon, 1664.
 Delarnell, L. et M. Sendrail, Textes choisis d'Ambroise Paré, Paris, 1953.